



関ヶ原軍記

二編 九三

九四

遠 13
2207
27





門へ遠 13 特  
 籍 2207  
 巻 27

牛本  
 池清

関ヶ原軍記式編巻之廿二

目録

一 笠縫堤合戦の事

并 中村勢 鳴 友利が為る敗軍

の事

一 鴻が軍謀果すあつ事

并 井伊直政勇と衰つて味方と

和漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

凡士農工商も夫々の職を家業に因て世傳の只物を言ふ  
 今日と管も世襲一般に然るに近世字本の巻中、柳り白糸  
 何種かの書入又ハ秋之實来りき、本偶ハ職見若き  
 男女の陰癖を、画き君臣父子の中や、面を赤め合事  
 同く多ク、是當ハ必竟一時の興ノ象ノての戲言也、人ハ併  
 其職分ハ道具ハ疵付り少ハ癖を有リ著述拙ハ筆業者の誤り  
 何ふを只言語と云々其遇ちと各免卷中ハの戲画樂書、繪  
 池田屋清吉は是を欲し然不喜、因て承代りて諸君子許ある、爾  
 磨石山人識



引揚の事

牛本  
池清



園ヶ原軍記武編卷之廿三

笠原堤合戦さきぬいづこの事

并中村勢 源友房ともともが為なり

敗軍まへの事

去程ふ石田が先手さき源左近さね直ただ徳とくへ

旗はた出でせし池鹿いけか一ひとと源田中げんたなか綱つな言こと

秀家ひでゆき武ぶ万ま余よ人ひとと之これ押お出でせし



又三城が二陣痛生債中、勢  
を纏出さすその節より、小細川  
長出、勢は管あり、赤園、赤勢、  
次傳、の等せんが為、千、株、瀬川  
とあり、南て出張せし時  
家康公も、虚、宣、藏、山より、以後  
あつに、頃、を、受、去、又、年、九、月、十  
四日、己、の、刻、斗、り、形、り、折、り、

秋の晴天、輝、中、村、武、部、少、輔  
の、軍、代、同、性、彦、右、衛、門、も、先、陣  
野、一、色、頼、母、兼、内、通、乃、直、人、等  
の、者、下、知、し、て、云、と、お  
出、も、と、軍、配、作、法、慶、重、と  
内、府、公、大、の、千、御、感、公、あ、つ、て  
武、部、少、輔、も、若、年、より、弓、矢、と  
か、ろ、く、能、さ、さ、が、ら、ひ、と、多、く



のちらうらゆ急なり日人死後よ  
も彦太持の軍代としてその  
作法を多く尋問するのありと  
うんとあるこの時申村が手  
の美者どもいささかひよきく  
株瀬川に押つた敵のき多く  
うら敵見く川を執んとて此  
幕 泉康公大さうし御

株燭換ト心得ざる申村勢が  
いこのの仕掛指印ありこの川  
敵執るる生くる場所のきある  
君トそのありこれこそ妙地也  
うらうらなるれと 作せ者く  
後々軍役をとりつと  
沖下知ありと雲石申村勢は  
美ののたの川獨り臨んづく



株 湑川の湑湑川向ひ 釜巻  
堤 干らんんと 崎 左を 懸  
この時 謀 晷 と 擡 つゝ この 横  
腹 一 軒 銃 砲 二 ようと 依 せて  
左 近 右 近 を 射 う け 敵 を 撃  
つ ゝ 中 村 が 軍 兵 ぞ も  
む ゝ 川 へ 舟 入  
きりり の せり 穀 肉 運 担 一 色

頼 母 の 友 人 大 山 平 割  
勿 沖 兵 軍 此 仕 是 擧 兵 平 々  
止 ち 下 知 一 一 々 々  
當 々 承 門 々 々 々 々 々 々  
て ち や 双 方 銃 砲 戦 舟 々 々  
種 々 々 々 今 々 々 々 々  
お 々 々 々 必 定 敵 軍 々 々 々 々 々  
甚 々 々 々 討 伐 々 々 々 々 々 々 々  
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々



の森をこも藪をこまわて馬越  
入きんととまらる時と見く申村  
が軍を有の森さうたす川越  
源り道沿つてまに押らる時  
鳴たを貝を吹たらん堤の  
まににやうころ是輕た立り  
く一度り鑿炮を打も急申  
村が急年たの的くぬく教く

ふ赤教さうころの時教内野  
一是輕母等下知して討死く  
搦りて陸を入きともいなり  
申村が手此若侍のころちを  
武骨のまへあるは秋那虎之助  
まき青り槍を合きまきこの  
勢いふ武老百騎斗り鯨波  
の音を揚くはくこの系く



押舟く 馳あく 陰城入を  
さす へり 急く 鴻が下知  
軍謀あり 申あられ べらんと  
令新して 世是 煙衣 佐左 姓  
千級軍 さまこん を 足て 申村が  
勢ども 大さ 千 恨 び さま ちや  
うらうひの 勝利 あり け 勢ひ 小  
追散 せと 福波 の 急 城 上

て 追ひ くる ころ の せう 先手  
わむ しく なる けり こそ ちや  
初 色 たり ころ の 島 を 見 海  
く 勝 左 近 友 けり 千 余 人 備 生  
備 中 八 百 余 人 二 千 千 あり して  
園 の 急 を あ げ けり づ ち け  
お ち せ 勢 ひ 大 山 毛 崩 けり  
如 く よ 打 出 たり 申 村 が 軍 あり



をうろこれを見くろくあり  
と鐘を急使も内り敵兵向  
近く武老馬を急切する  
ゆへ強立られく敵軍のいり  
立ち下りこの時敵迎山くそあ  
くら回中 ありまうた  
警彼や急ての 御軍令  
ありといへる足のかきまの

敵の備に懸りく下知  
られ同勢の向の境  
く千斗り難の事とありて  
横合に鐘皮の急使あげて  
攻戦ふこのせついつくも働くと  
いへる勝左近が軍備急に計  
ひ中村が軍急なる急足もねく



船をこらり既中皆殺し一も  
ありてさしとらりて中むらり  
先手此内平中村助河毛  
次所を清回く我八と我天理  
堀系梅津其利お寤亮  
のども二十八人つらく  
うひく討死さこの島崎が槍  
先く南のそのちうく敵軍を

義内通種一色頼母お味方  
一願し一兵今中いさく  
やどるあささ記よ川を渡  
ぬらさ増あさり討死乃是悟  
無事禮の分際とて川を渡  
さの竹中が志更く不是人  
ありと止り下知さるとい  
魔衣立した味このありさ



そと友とが能事と見え  
執り有る方の玄年中に備  
を立懸く下巻りに追ふる  
川原づつと放走せり

鶴が軍儀是より尚ら申  
并井伴直政曾と長門く  
味方此勢と引揚る申

叔をけし席有馬玄蕃頭武千代  
侍頼波の声とくく鶴が先  
手より鎗込入を追立てて揚る  
名返きんとお仰く石田が  
京来乃花本印記と大曾より  
く鐘を入色りりく  
我より長坂此の年三席横山  
笠物亦来り大ひり我より



よひ子 陸先 突 ぐく びづんが  
籍とも 知色 ぐく 新葉 有て  
難 坂 新 藤生 佐中 是を  
見く 了 業 舟 ぐく お 執 了 田 中  
が 起 長 文 博 古 修 坂 本 和 水  
お 多 お 多 の 小 笠 隆 の 提 乃 方  
笠 重 村 了 て お 執 了 了 の 敵 を  
秀 家 が 軍 將 亦 下 知 了 て お 執

く 又 有 了 了 此 難 本 勢 も 此 の  
新 了 了 て お 執 了 了 の 時 中 村  
が 衆 臣 難 一 是 頼 母 了 了 度 了  
く 下 知 了 了 て 深 田 了 了 房 入 了  
難 坂 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了  
母 衣 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了  
了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了  
了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了  
了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了  
了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了



右邊の事と事身終るに実味  
手そ飛りたむ振之に漢香  
の其槍越槍極合手門阻んで  
流の中より流軍あり来れを  
いりく野一色を働あゆむし  
て終り漢香に討色より又  
菽肉通之故のやと討とち  
らとく手面ひふ自由之形て

四方八面より修く軍乞をあり  
く流よ大会致とあらふの廊  
嶋左近下知して警彼や軍の  
勝利ありと惣軍孫周致揚々  
手実素方此孫の手に却き  
より時手  
内府公を以  
体と孫山を  
所賢あか  
七川井仔直政の先手本候



乃石末乞<sup>い</sup>城<sup>じやう</sup>繰出<sup>くろし</sup>て赤<sup>あか</sup>籠<sup>かご</sup>城<sup>じやう</sup>  
抑<sup>おさ</sup>へて<sup>し</sup>艦<sup>かん</sup>千<sup>せん</sup>伎<sup>ぎ</sup>を<sup>を</sup>出<sup>し</sup>せ<sup>ん</sup>  
と<sup>と</sup>次<sup>じ</sup> 内<sup>うち</sup>府<sup>ふ</sup>公<sup>こう</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>城<sup>じやう</sup>  
御<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>い</sup>と<sup>と</sup>直<sup>ち</sup>政<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>  
御<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>は<sup>は</sup>る<sup>れ</sup>汝<sup>に</sup>ち<sup>が</sup>そ<sup>あ</sup>る<sup>手</sup>  
あ<sup>あ</sup>ふ<sup>る</sup>の<sup>の</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>い</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>涉<sup>せ</sup>り<sup>ぬ</sup>之<sup>之</sup>  
直<sup>ち</sup>政<sup>せい</sup>御<sup>ご</sup>交<sup>かう</sup>千<sup>せん</sup>田<sup>でん</sup>中<sup>ちゆう</sup> 有<sup>あ</sup>馬<sup>ま</sup>中<sup>ちゆう</sup>村<sup>むら</sup>  
お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>属<sup>ぞく</sup>忽<sup>とつ</sup>乃<sup>の</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>城<sup>じやう</sup>伎<sup>ぎ</sup>を<sup>を</sup>

頁<sup>ま</sup>色<sup>いろ</sup>千<sup>せん</sup>城<sup>じやう</sup>く<sup>く</sup>依<sup>よ</sup>る<sup>葉</sup>  
強<sup>ちやう</sup>向<sup>かう</sup>山<sup>さん</sup>一<sup>いつ</sup>戦<sup>せん</sup>伎<sup>ぎ</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>存<sup>ぞん</sup>じ<sup>ゆ</sup>と<sup>と</sup>  
り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup> 内<sup>うち</sup>府<sup>ふ</sup>公<sup>こう</sup>是<sup>ぜ</sup>を<sup>を</sup>  
笑<sup>わら</sup>ふ<sup>る</sup>く<sup>く</sup> 御<sup>ご</sup>機<sup>き</sup>機<sup>き</sup>換<sup>か</sup>へ<sup>ん</sup>  
今<sup>いま</sup>日<sup>にち</sup>此<sup>こ</sup>軍<sup>ぐん</sup>を<sup>を</sup>用<sup>もち</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>是<sup>ぜ</sup>を<sup>を</sup>  
石<sup>いし</sup>田<sup>でん</sup>が<sup>が</sup>謀<sup>ぼう</sup>略<sup>りやく</sup>を<sup>を</sup>し<sup>の</sup>の<sup>の</sup>戦<sup>せん</sup>う<sup>ひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>  
内<sup>うち</sup>直<sup>ち</sup>政<sup>せい</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>此<sup>こ</sup>軍<sup>ぐん</sup>を<sup>を</sup>用<sup>もち</sup>る<sup>る</sup>  
大<sup>だい</sup>垣<sup>かき</sup>乃<sup>の</sup>城<sup>じやう</sup>を<sup>を</sup>え<sup>え</sup>甚<sup>しん</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>く



おちるらちち南高山の大軍  
ありびり大音が軍を承りし  
る巻して安危のりくさく  
屋しと縁りし之を山只  
此教ふり敵を大に利を  
好く味方の敵軍しりこの  
うへに果方此軍勢押しりて  
も教ふればそ尾を左り前り

制るべし急軍を引る  
らり邦をる此くともりこの  
軍取果有く揚起るべし  
去部を一人系いごとく  
軍勢を引揚りさるりまの  
本多忠勝が手斗り急軍款  
去り去りみをもて教ふを  
りつるりいさけく



抑々り、叔父は時本多忠勝の千  
八百余人を率いて岡の産  
地あり、笠置をひくはち、一強出  
たり、流石の左近もこれを見  
て、實りくくろく、一かゝらんよちの  
うらひよ、十分勝利、一これに  
おぼび、本多がそちの千一戦  
して、軍勢と志をくく、ひる

をよるり、志くく、この敵軍は  
方々、是子のり、来るべし、と  
おぼく、暫時、執るひと、出さる、決り  
入るん、と、さる、おと、見く、井作  
多助、少輔、直政も、啄木、の、獲ひ、お  
赤母衣、を、裁く、喜行、と、枝、よ  
ち、の、子、指物、と、決り、これ、の、無、陰、の  
く、あり、あり、河、系、毛、の、馬、千、の、金



覆輪の鞍を我宗記を打振  
く双方執心此中を季破り  
季切多三呂柄の強敵もち双  
方捨を合せうらとらと打  
あはけく馬を一きんく季  
也して味う此軍勢引やく  
と下知一あり他人乃下知あ  
らべ小気候して暮あふ

そのともるあそ井伴及の  
下知世世面く虎口とらり  
げうらとらうて本多が徳へ  
情くもくくそあふぶくま  
きううり勝きこれを見く本  
多が徳へそ名つあふり玄士と  
引きておく揚貝鉄吹とそ  
さすれば浮田が軍名高先おり



志りぞくこの時勝が是りの  
林事物之直政と全陣よ惣軍  
決行をいふに芝居を徳川の  
所方一門をかり

内府公所機嫌よく

家康も左衣子ついであり  
井仔布多とも羽根強く子星  
城一飛く伝はりとも意心

所機嫌よくこれより三回く

りこれ陣所と相守る勝友近  
が軍法より実素勢大垣城を  
責んと名ひふその候るけ

是は石田が狗算用お遠せり  
偏りむろいんよて籠城  
おきくころごとく形く

内府公今晚る赤坂より所本



陣と云ふは其後及堂之虎と  
百くくさぐめて 作せらるる  
款名大垣城ノ楠籠りての戦  
うひまをりくしつて孫殿斗  
越一虎を永陣に放る  
いそ地明白の青母がさし  
出して一戦し勝敗は交  
まらざるの条そのむいおん

らるる一そのりし之を虎  
畏よりて中らるる今は大軍  
名一修中味方の下知放り越  
一攻んや城中くころの敵を  
の謀るべしは此後  
御免は致さむるべし  
内府公宣りくさる幕の折り  
りどるある人あり実を



老將の部るれ其略層一連  
刻ち所陣觸有り依く大垣の  
城向けて池田清野の友人に  
作身其外に徳軍勢の明日  
冥ヶ系は押出—直中上流有  
屋之又其順路るれ依和山  
の城攻振—友直進る太平  
と其る—子々池登るべきの

系心ゆべ—その所觸之石田が  
忠びの者は其攻りけ急ぎ城  
中へ内通其仍る三放その  
中冥ヶ系は押出—て一戦よ  
及ん—と次陣事  
東思又も不忠成の御軍端之

冥ヶ系軍記二篇巻の廿二終  
池清

池清



池清

園ヶ原軍記武編卷之廿四

目録

一 蒲生備中かまき的言ことば之事こと

并石田三成いしだ大垣城おおい出張しゅちやうの事こと

一 石田園ヶ原いしだヶ原がはらに出いく軍勢かみ配當はいたうの事こと

并あ内府公儀うちうら殿系とのん決断けつだんの事こと



池清

同ヶ原軍記或編卷之廿四

蒲生備中かみ的言ごころの事こと

并石田三成いしだ大垣城おおい出陣でしんの事こと

曰く石田治部いしだ少輔せうぶ三成さんせいは九月くわがつ  
十四日じゅうしにち代萩しろへへに石田海兵衛いしだ  
治部ちぶと云ヶ原うがはらに押おし出陣でしんせし



小宮村小池むらに陣營ちかあり  
徳方あては手前あてとして  
内府公乃涉ま籠先まの出まとお待あ待  
ところろよ大旨ま来りて合戦あの指さ  
子とお徳あもさそそ  
内府公も未明あに御出立ああり  
室ヶ原は御出立あられ榎あ死あり  
御陣あと居ああり井行あ忠政あを

福鴻が陣あ新あ月あ村あ向あひ對あ面あし  
及び歸りよ本多忠勝と新あり  
幸あ得あ有り既あし以あ方あ浮田秀嘉  
合あ戦あを始あむらに徳あ山あく福鴻  
と浮田と闘戦あせり

既あ月あ是あ後あ徳あ堤あの合戦ああり



関東勢いおのひれ布しと退  
けりしころ大垣の城をえき退  
仍て石田ヶ軍備ありぬる志あり  
まき若鷲左をその日め執るひ小  
勝利を均く討て首殺武百七  
十三級をもち壘そのひせ一色彩  
ぬれ討てたりその中百六十八  
級を討て左近が手に討てり七族

之級を浮田秀政が手に討てり  
二十六級を蒲生俊中が手に  
討てりし首を討てり大垣城本  
を奪取ししを石田三成大  
いに悦び手始りのりしなり  
勝利したるなりし時し首を  
を討てりし首を討てりて天候  
あり左近これを見し蒲生備







原さとのあつた方より中集の  
とくありと吐く所らうあつた  
大谷吉隆より使をよめて  
のり 紙 いろいろ

内府公上洛有ての後悔  
急きりさるる大垣に難  
して款を待交務と云ふ人  
望るるまゝあつた人  
物 東山と云ふ

ヶ原おのつた云と調ト合せ青  
世ヶ原へ出く名あつたに  
うひ務員と交へる人  
来りりたを三成をりといふ  
てた近干内法に  
谷と河トくさる故  
とお法して出候  
中よふりりくおらるるふ



お極むる時、痛生ののり、くは  
合戦のたより、初り、る、つ、く、必定、集  
り、の、赤、魚、べ、一、依、了、大、る、以、日、の  
敗、軍、る、く、ん、誰、も、討、と、あ、と  
ろ、ろ、つ、く、ら、色、り、ら、い、わ、ず、指、徳、人  
大、き、り、力、と、病、火、時、は、時、た、道  
大、音、と、流、石、の、痛、生、及、も、不、足  
れ、の、と、ヤ、リ、さ、ら、ら、の、う、那、軍

の、ろ、く、ひ、り、て、軍、会、れ、多、少、  
も、ろ、く、く、く、く、く、の、致、く、ひ、  
の、集、一、先、手、と、仕、事、べ、さ、ら、く、い、  
れ、く、く、く、く、必定、孫、利、成、く、く、く、  
徳、軍、も、い、さん、で、固、ヶ、系、一、出、を、  
く、く、く、く、の、く、集、く、く、徳、人、  
か、く、く、く、く、と、く、集、く、く、時、  
三、成、大、の、く、く、く、で、時、が、ヤ、り、



通り明日の必定の掃討と云  
バ蒲生後中の曰くや  
今夜中へ押出でて幕府  
へ会糧もそとくよきわく  
軍兵骨を雲霧乃大軍と戦  
うひく利あるべしやあ  
兵明日の戦ひの掃討も負ても  
後中父子千於て討死せし  
ま

那りさかせし何さぬも  
言葉れどく能く足さるり  
友をも此尾をなせし  
を人者士年といもめし為し  
那の中へあるべし  
石田三成を配りし  
大垣の城乃る春を本丸に  
福原志保元二の丸に垣足



象寺 慈谷内藤之介 木村惣左  
兼つ三の九平の結月と大將と  
して大垣城におきしせり信  
嶋津義弘 小物川長 浮田秀  
家 石田三成お惣軍に万全騎  
九月十日の戌乃中刻より打出  
随分志づいふ流音より尺へ  
ざらやうよき音しはねあられ

相明を遊む馬に薬をさして  
扇田衛乃を押し下り藤原  
山の味この舟も目を釣り  
練り世は村より雲ヶをく  
子代刻をうりに急陣し  
安藤の宰相秀元は仗を以て  
りし入らるの明朝一戦り及び  
山の条を新乃山軍勢と打ち



され浮田とお並んで先手陣  
西頼三中心のうしひ入るる  
とらうの千急ぐ先利秀元を  
吉川が肉通しうつて宮東志  
しと懸るやうに延言分  
あゝ心依る石田元之丞  
及ぶ先志うらば集先陣  
なまなり後陣と西頼三の

とて松尾山の金吾の陣へかて  
対面をととひらに病氣にととて  
西金吾の陣へかてと延也  
して石田の宮の刻り小宮村  
ふ急陣しかり折りし中  
大西ゆゑ軍兵大なり  
うりこのせ川大谷吉澄の智略  
よて来り対めんして石田



りつらつ明日の致るひ平の  
是れとも必死と極めねをおる  
むかしの松子といひ金吾が  
心腹を斗り離し又朽木秋  
月松坂おきれ 別しんと  
お足へふんば孫利を交して  
あつるべし志るれを安否れ  
りつらつ明日の致るひ平の

千代へ有て松久へしつらつ  
吉原を陣所へ歸りつらつ部で  
それより石田が陣所小園村の  
前へ松久と柵をめぐりつらつ  
是れ松久を陣所とお構へ  
く松の松子とぞおらつらつひ  
けら



石田の一黨いっだう冥ヶ原みやげへおろし軍ぐん  
勢せいと配はい南なんののの  
并ならび内府公若うちふくこうわく度た原はら城しろ廊らうののあま

取又と細この山やま越こえりふ南なんて  
小池村こいけむらののあまびあまの石田いしだ前まへに  
小物こもの橋はし津つさ七しち子こ余あま持もちえしお値あひ  
よりより又また鴨鴨津つをを原はら越こえり石田いしだ

と陣ちんとと籠かごへくく及およ子こ川がわをを越こえ  
小園こゑん邑むら乃の南なん辰ちん巳みむむららひひく  
そそああくくよりよりままのの浮う田た秀しゆ水みづをを  
冥ヶ原みやげ細こ物もののの方かたへへ取と明あきががのの小  
おおししてて陣ちんまま時ときくく鴨鴨津つ  
ヶヶ勢せい八はち子こ余あま人ひと先まへ陣ちんをを嶋しま津つ  
中なか勢せい古こ備び根ねメメ丹に後ご松まつ浦うら三さん  
原はらをを兼かねよりよりままのの大おほ谷や吉きち陸りくの



石原端を下りて谷川を渡り  
細水の山越後ろりして辰巳  
のうらやま川くさるるより  
たも東人古川を岸を渡り  
始りくして鬼毫のさづら  
二心余騎雑兵六百余人  
陣しりり又嫡子大谷大守  
次男木下山越後見事三子降人

と石原端のありて一徳一誠  
とふふいふ中仙道より  
中納言秀忠卿御着陣の時  
清先誠をくさるる又戸田  
去藤も平塚固情も大谷刑  
部も備が左りの眼を値へり  
又南美山より中兵勢七万降  
人籠の手と魔うせり







武番多々北乃手より押出  
人々より尾田一柙 堀尾松  
倉 遠及おるり之をんを田中  
細川生約等ありを次の松平  
下野守との御籠あり先陣  
此軍代も前めどく刻ち井  
伴重政あり惣軍八百三千餘  
騎ありをうちり石田が値へ

と見る所一をん千和度左  
馬を介 山内討ちる攻むべき  
との定めあり部のおとく  
御城へ定め有く是の刻以麻  
新は入るるのせり金吾中納  
言秀秋よりより軍仗来りて  
今宵石田をとりし磯津小西  
浮田以下此軍会をち孫くは







とも無き此人を尊く  
皆軍役なり是れ者た斗也去  
は内食更に後素白の山履ひと  
有るこれの義経の履ひと移さ  
是ころ源氏守代の内履ひと取  
りし時境も三十二間の星境  
あるに綴り白き履はかゝるを  
引とてこれに御しり

達させし御禮をむくさるの  
らん心金のの節唐鉄の佩立  
を。 有れりし御塔あり源氏  
守代乃御太刀と由衣り此方又  
持せらるる又黒ぬりある厭離釋  
古徳水降古の御籠を持せら  
る御先へも白籠七本御馬  
帯一の金乃扇子あり御籠



車形の細白孫左衛門は頼山陽  
酒井河内守お徳より頼山陽  
宮の一天下を治す所  
腰を掛りし時所頼本は軍  
勢 沖前守をくお徳へ  
此小姓流をく列せり  
軍士の志をく 志將の  
徳と用ひ老將もまゝ 志將の

志將の用申すはくはつとも  
大將をみよては頼山陽の  
ありこの候を  
東照宮も治存すそ頼山陽年  
六十歳に際り終に此時山頼中  
の面をとりて  
くらの先一千先年古古園拾七  
万余騎志勢をく



家康の對陣たいじん有時あるの徹とほり  
られ六ヶ敷大におほなりりりれども  
支たさへ千勝利せんしつりも均なりゆらふ  
この度の籠本かごもとも多おほくそと  
軍勢いくさも均なり且かつ相手あいての石田いしだあり  
唯一ただ一ひとの勝利しつりせんの勿論もちろんの度  
ありとあり度たび原はら城じやう骨ほねまませりり  
清きよ正まさとてて兼かね明あき中なかつでで石いし野のと

成なりのいい日ひ分ぶんの長なが久く手てとと日ひづ  
此こゝ沖おき軍ぐん勢せいとて池田いけだ孫まご入いり森もり武ぶ  
藏ざうと討うつたああひひに物もの語ごり  
松まつが子ことてて徳とく軍ぐん士しもささららに  
山やま崎さき常じやうみみとてて山やま崎さき軍ぐん星せいの  
光あきり増まへへも明あき方かたにちちり  
たれたれ馬うまとてて百ひゃくれれ  
清きよ正まさとてて兼かね明あき中なかつでで石いし野のと



終るる日いつくぬ日ぞや  
長長又年九月十日之園東西  
由の人々死を争うるを  
骨骸く物の色曾て見え  
灰志の雲之依く誓くく  
内相えつり卯乃半刻ともお  
しき時種上村細の及南ぬ  
極配野とりつるらけ山系く

誓くく所本陣と居る候  
お備越却て冥ヶ系町東乃  
駕十二早先干をみ出く酒  
井河内書い流籠城たりよ  
那上村と冥ヶ系とのあふに  
お出くもむらりとも頼  
りし終ぎりうく真乃雲  
しき一寸さだも見えん代







